# ずいひつ ②

ZUIHITU

## 「地下水都市」熊本の水を守り、伝える

熊本市上下水道事業管理者
三島　健一

この４月に上下水道事業管理者を拝命した。市役所奉職後、様々な行政分野でそれなりのキャリアを経てきたが、上下水道という公営企業、そして何より365日24時間絶え間なく稼働するインフラに携わるのは初めての経験であり、常に緊張感とともに新鮮な刺激を得ながらの毎日である。

さて、本市は74万市民の水道水のすべてを地下水で賄う、日本で唯一、世界でも稀な「地下水都市」である。悠久の歴史の中で火山灰や溶岩が堆積した、阿蘇から連なる地層がフィルターとなり、「蛇口をひねればミネラルウォーター」と称されるおいしい水が育まれる。この壮大なる自然のメカニズムは市民の誇りであり、熊本城と並んで唯一無二の「熊本」の個性を特徴づけるものである。

地域の歴史や文化は地勢と大いに関係するが、その証左となるのが地名である。実際、熊本市には「水」にまつわる地名が多い。本市水道発祥の地である「八景水谷」のほか、「水道町」「神水」「出水」「水源」……、そして我が上下水道局の所在地は「水前寺６丁目」で、かくいう私の出身も「出水（いずみ）小学校」であるが、これらの地名は、熊本の地勢や風土が「水」と密接につながり、市民の暮らしには水の存在が不可欠であったことを示しているのではないか。

昨年、本市水道は100周年を迎えた。明治の末期に、市民の「いのち」を守るべく、本市特有の地下水の恵みを活かした水インフラの仕組みを創り、長きにわたり育んできた先人たちの功績は大きい。私たち水道事業者は、水の恵みを守り後世につないでいくことはもとより、水と密接につながった地域の歴史文化や風土にも思いを致しながら、その価値の大きさを伝えていくことが使命である。職務を通じてそのような機会をいただいている有難さと責任の重さを強く自覚しながら日々尽力してまいりたい。

## 機械工学で見つけた「水を届ける力」

2025ミス日本「水の天使」
高坂　実優

私は水の天使の活動を通じて、機械工学が水インフラという形で人々の生活を支えている現場に直接触れられることを、心から嬉しく思っています。

私は早稲田大学創造理工学部総合機械工学科４年生で、機械工学の中でも水や空気の流れを追う流体力学を専門とする研究室に所属しています。そして、大学卒業後は大学院に進学し、脱炭素技術である岩石の研究に引き続き取り組む予定です。大学では、フラックスや流量、管内圧力といった水の動きを定量的に評価するため流体の動きをシミュレーションや手計算で追っています。流体力学の基礎として、ポンプや配管の設計といった、流体を安全かつ効率的に届けるための土台を授業で幾度も計算してきました。上水の一滴一滴が、膨大な計算や緻密な設計、そして確かな技術力によって支えられていることを知るほどに、私は工学の奥深さにますます惹かれております。

しかし、流体力学は、ただ机上で計算して学ぶだけでは得られない顔があることに気付かされました。それは、実際に現場に伺い初めて実感いたしました。例えば、山形県天童市で行われた水道通水100周年記念式典では、地域に根ざした技術の工夫を知りました。また、これから伺う高知県高知市でも、過去から未来へと繋ぐための上下水道技術を学ぶことができることに胸が高鳴っています。

日本では蛇口をひねれば当たり前に水が出る。その当たり前の裏側には、100年を超える時間の中で、数えきれない努力と、技術者たちの探求心を感じております。水道は、誰もが毎日使う最も身近なインフラだからこそ、私は未来を担う子どもたちに向けて、水の尊さと、水道を支える技術の力強さを伝えて参ります。